文献案内

樋笠逸人「鴨社古図（賀茂御祖神社絵図）と賀茂社御参籠」（橋本政宣・宇野日出生編『賀茂信仰の歴史と文化』神社史料研究会叢書第六輯、思文閣出版、二〇二〇年四月）

中世の神社境内図として代表的な存在である、下鴨社家の鴨脚家伝来、京都国立博物館所蔵「賀茂御祖神社絵図」（重要文化財）に関する詳論で、制作年代・背景の再検討に及ぶ。以下、「e国宝」での公開画像も参照。

はじめに、鎌倉時代から室町時代に及ぶ制作年代に関する先行研究を整理し、江戸時代中期以来の「斎院御所」の比定について、本図の西北部「御所」ではなく、馬場西の「神館屋御所」と改める。ついで建久九年（一一九八）後鳥羽院政開始とともに行われた御幸の記録により、恒例の賀茂祭などの「内御所」と、後白河院により設けられた臨時の御幸・参籠に用いる「外御所」とを確認する。「外御所」は後鳥羽院の参籠で定宿とされ、本図の「御所」の構成とも対応する。本図「御所」の周辺には加筆・押紙が多数あり、建治元年（一二七五）亀山院参籠の際の指図（同じく鴨脚家伝来）と比較するに、加筆後の状態が指図とよく照応する。本図の原本成立は鎌倉期に遡り、亀山院政期頃に加筆されたことになる。

治天の賀茂参籠について、後白河院から伏見院までの事例を網羅し、性格の推移を整理する。宿泊を伴う参籠は、治承三年（一一七九）後白河院が初例と目され、石清水参籠を含めた法華経千部転読の一部である。後鳥羽院では斎院制度との入れ替わり、社家・氏人との関係など、権力強化との軌を一にする。後嵯峨院のもとで石清水参籠が恒例化したが、賀茂はそこまでには至らず、後深草院は消極的で、亀山院は七箇日参籠から宮廻を繰り返す百度詣へと発展させ、後宇多院から後伏見院では頻度と規模が縮小する。本図への加筆も、亀山院政期に必要とされた蓋然性がある。

本図には、宮廻の経路や従者を含めた宿所を確認する機能に加えて、社殿・御所等のあるべき姿を記録し、修造経費の負担をめぐる朝廷と神社との関係からも必要とされたと評価する。

（藤原重雄）

熊本市熊本城調査研究センター『特別史跡熊本城跡総括報告書』歴史資料編（二〇一九年三月）・同調査研究編（二〇二〇年三月）

熊本城と城下の総合的な調査研究のため、二〇一三年一〇月に設置された熊本城調査研究センターによる報告書である。二〇一六年三月に整備事業編が刊行されたが、その後熊本地震が発生し、熊本城も甚大な被害を受けた。歴史資料編・調査研究編は、その復旧事業と並行して進められた調査・研究の成果も含めてまとめられたものである。

歴史資料編は熊本城に関する主要な文献史料、絵図・地図、写真を収録する。文献史料は中世の隈本城から昭和三四年（一九五九）の復原工事仕様書までを取り上げる。近世分の永青文庫細川家文書の一部は、今回新たに翻刻されたものである。絵図・地図は城絵図・屋敷割図・修補願絵図や、鎮台・師団関係図など六九点の図版と解説を掲載する。写真は明治五年（一八七二）以降の一一六点を掲載し、撮影場所・時期等も考証を加えている。さらに報告書収録分以外も含めたリストがあり、現時点で把握されている熊本城関係の文献・画像史料の全体像を知ることができる。

調査研究編はこれまで約六〇年間の発掘調査の成果を総括するもので、遺構の図面・写真、出土資料の実測図を多数掲載する。付論として「熊本城の石垣変遷」、「熊本城の出土瓦編年試案」の二編を収録する。

このように多様な史料をもとに総合的な分析が加えられており、熊本城研究の現在地を知ることができる。特に近世の被災と修理の履歴は文書・絵図から丁寧に明らかにされており、これは例えば石垣遺構を分析する上でも前提となる重要な成果である。関係する未調査の史料もまだ豊富に存在すると思われることから、今後の新たな成果も期待される。また、文化財の「活用」が推進される昨今であるが、調査・研究の成果を踏まえた適切な遺構の保存・整備にもつながっていくことと思われる。それぞれ二分冊の大部な報告書だが、熊本市ホームページ内の同センター刊行物紹介ページにて公開されており入手も容易である。

（林　晃弘）

公益財団法人元興寺文化財研究所『華厳宗元興寺所蔵石造物調査報告書』（同、二〇二一年二月）

南都七大寺の一つとして寺勢を極めた元興寺は、中世に変容を遂げ、宝徳三年（一四五一）の土一揆によって主要伽藍のほとんどを焼失して衰退するが、その法灯は分立した華厳宗元興寺（五重塔跡、観音堂）・真言律宗元興寺（極楽坊）・真言律宗小塔院の三寺院によって今日まで守られている。

飛鳥から平城京に移転して一三〇〇年となった二〇一八年、これを記念した展覧会や講演会などが三寺院と元興寺文化財研究所との共催で開催された。その準備過程において、華厳宗元興寺に聖教や経典、位牌や工芸品などの未調査資料が多数存在することが判明し、各分野の調査が行われることとなった。それらの成果はすでに展覧会図録や調査報告書としても報告されている。本報告書は、安政六年（一八五九）の火災以前の境内地の様相や信仰のあり方を探るべく実施された石造物調査の成果であり、第1章から第4章にまとめられている。また、第5章は令和元年の古文書調査後に見つかった古文書や境内図を掲載する。

華厳宗元興寺には安政六年の火災で焼失した五重塔（奈良時代）の礎石から昭和十五年銘の標石まで、二九三点の石造物が所在する。第1章ではこれらを時代ごとに概説し、種類・法量・材質・銘文といった基礎的項目を石造物一覧として掲載する。第2章では本堂周辺に散在する礎石の石材種類と形状を分析した結果、蘇我氏と関係の深い榛原石（はいばらいし）（流紋岩質溶結凝灰岩）が含まれていることを明らかにし、この石材が平城京内で使用される希少性についても言及する。第3章では五重大塔の一七基の礎石を礎石柱座の形状と配置、帯磁率を検討し、他寺院からの搬入の可能性を指摘する。また、第4章の「啼燈籠」については、過去の研究や古文書調査成果も援用し、別の燈籠の部材との混在の可能性とその時期に言及するなど新たな知見を提示する。

今後も多角的視点からの史実の発掘によって、「ならまち」の下に眠るかつての巨大寺院の様相が明らかになっていくことを期待したい。（太田まり子）

倉田喜弘編著『くどきぶしの世界』（ゆまに書房、二〇二〇年一二月）

「くどきぶし」は七七調の詞章で一定旋律を繰り返し、災禍・時事や心中物といった人々の関心事を叙事的に唄った歌謡である。「サアェ」「やんれ」といった囃子言葉も特徴となる。中世以来の語り物である説教節や、三味線の伴奏を伴う門付として芸能化した歌祭文など、様々な声の芸能の影響を受けつつ、特に江戸時代後期から明治期にかけて流行したもので、その面影は盆踊りや瞽女唄に留めるとされる。娯楽や情報が少なかった時代に流行唄として人々を楽しませ、人気を博したことは詞章を摺った数多の摺物の存在が示している。

本書はそうした「くどきぶし」に着目し、往時の人々の関心事を掘り起こしたもので、四七件の翻刻を表紙画像と共に紹介する。さらに史料を一四項目（地震／火災／風水害／病気／信仰／道中記／世相／開国／経済／伝承／治安／女三題／心中／ちょぼくれ）に分類し、〔参考〕として語注や当時の世相に関する注釈で理解を助ける。また巻末には、明治四五（一九一二）年の『佐渡新聞』に連載された「くどき節の今昔」を参考資料として載せる。明治も末になれば、すでに往時の勢いは失われた様子が伝わると共に、今となっては窺い知ることができない摺物購買層についても、需要は冬の農閑期に集中すること、活版ではなく仮名つづりの木版が求められたことなど理解することができる。さらに数字を挙げながら地域の出版文化や流通事情を記すその記事は、江戸後期の庶民向け情報誌の性格も有した「くどきぶし」が伝える情報とは性質が異なることにも気づかされる。その対比によって摺物から新聞へ、新聞雑誌の文化が新たな近代の情報源として定着してゆく一端を理解することができる。

なお、「あとがき」によれば、本書の作成に際して当画像史料解析センター発行の『風説留中画像史料一覧（稿）』（一九九九年）、『摺物総合編年目録（第二稿）補遺』（二〇一九年）をご活用いただけたとある。『摺物総合編年目録（第二稿）』（二〇〇〇年）も含め、入手ご希望の方は当センターまでご連絡いただければ、送料実費でお届けする事が可能です。（三島暁子）